

# 墳墓から見た古代の 本州島北部と北海道

Graves in Northern Honshu and Hokkaido in the Ancient Period

## 藤沢 敦

FUJISAWA Atsushi

- ①はじめに
- ②古墳築造域の変遷
- ③統縄文系の墓
- ④「末期古墳」
- ⑤墳墓を中心に見た異文化間関係と境界
- ⑥おわりに

### 【論文要旨】

日本列島で古代国家が形成されていく過程において、本州島北部から北海道には、独自の歴史が展開する。古墳時代併行期においては、南東北の古墳に対して、北東北・北海道では統縄文系の墓が造られる。7世紀以降は、南東北の終末期の古墳と、北東北の「末期古墳」、そして北海道の統縄文系の墓という、3つに大別される墳墓が展開する。

南東北の古墳と、北東北の統縄文系の墓と7世紀以降の「末期古墳」の関係については、資料が豊富な太平洋側で検討した。墳墓を中心とする考古資料に見える文化の違いは、常に漸進的な変移を示しており、明確な境界は存在しない。異なる文化の境界は、明確な境界線ではなく、広い境界領域として現れる。このような中で、大和政権から律令国家へ至る中央政権は、宮城県中部の仙台平野以北の人々を蝦夷として異族視する。各種考古資料の分布から見ると、最も違いが不明確なところに、倭人と蝦夷の境界が置かれている。

北東北と北海道では、7世紀以降、北東北の「末期古墳」と北海道の統縄文系の墓という違いが顕在化する。この両者の関係を考える上で重要なことは、「末期古墳」が、北海道の道央部にも分布する点である。道央部では、北東北の「末期古墳」と強い共通点を持ちつつ、部分的に変容した墓も造られる。しかも、統縄文系の墓と「末期古墳」に類似する墓が、同じ遺跡で造られる事例が存在する。さらに、統縄文系の墓の中には、「末期古墳」の影響を伺わせるものもある。道央部では、「末期古墳」と統縄文系の墓は密接な関係を有し、両者を明確な境界で区分することは困難である。

このような墳墓を中心に見た検討から見ると、異なる文化間の境界は、截然としたラインで区分できない。このことは、文化の違いが、人間集団の違いに、簡単に対応するものではないことを示している。

【キーワード】古墳, 統縄文系の墓, 末期古墳, 文化の変移, 境界

## ①……………はじめに

日本列島で、大和を政治的中心とした古代国家が形成されていく過程において、本州島北部から北海道には、独自の歴史が展開していく。

日本列島の中央部に成立した古代律令国家は、自らの領域外に対して強い関心を抱き、軍事的手段を含めて外部への拡張の指向性を強く持っていた。また、領域外の人々に対する「蝦夷」や「肅慎」などの集団呼称が史料に見えるように、日本古代国家の他者認識と自己認識を考える上でも、この地域の検討は重要である。

本論では、古墳時代から古代にかけての時期に、古墳文化の外側、すなわち前方後円墳の造られない地域が、墳墓においてどのような展開過程を辿るのかを見ることから、異なる文化間の関係や、それらの境界を考えてみたい。墳墓を主要な検討材料とするのは、資料上の制約が存在するためである。古墳時代併行期の続縄文文化においては、住居跡の検出例が極めて少ない。ごく浅い竪穴住居か、平地式住居が使われた可能性もあるが、実態がほとんどつかめていない。そのため、集落を素材にした比較は難しい。遺構として明確に確認されるのは、平面形が楕円形の墓がほとんどである。したがって、古墳時代から古代まで通して比較検討が可能な素材は、遺構としては墓だけである。墳墓の具体的な様相の比較検討を中心に、他の文化要素も加味しつつ、相互の関係と境界について考えてみたい。

古墳時代から古代にかけての、東北・北海道の墳墓を、簡略化して示すと、次のように前後2段階に大きく分けられる。

古墳時代併行期においては、南東北の古墳に対して、北東北・北海道の続縄文系の墓という、2大別される墳墓が対峙しつつ展開していく。

7世紀以降は、南東北の終末期古墳と、北東北の「末期古墳」、そして北海道の続縄文系の墓という、3つに大別される墳墓が展開することとなる。

この中でも、東北地方における相互の関係、すなわち、古墳時代併行期における南東北の古墳と北東北の続縄文系の墓、7世紀以降の南東北の終末期古墳と北東北の「末期古墳」の関係については、これまでに度々論じてきた<sup>(1)</sup>。しかし、北海道での様相については、ほとんど検討できていない。当該期の北海道の墳墓についても、多方面からの検討が必要な状況にある。ここで系統的かつ総合的に、それらを検討できる準備状況にはないが、いくつかの問題を提起してみたい<sup>(2)</sup>。

本論の構成は、以下のようにした。次の②では、前提となる古墳築造域とその変化を簡単に確認する。古墳築造域外の墳墓として、③では続縄文系の墓を、④では「末期古墳」をとりあげ、その特徴と変遷を概観する。これらは、一定の時期に併存して展開するが、説明の便宜上、別々にまず整理したい。その上で⑤において、墳墓を中心に、異なる文化間の関係と、それらの境界について考えてみたい。最後の⑥では、⑤までの検討のまとめとして、文化と人間集団の関係などの問題について考えてみたい。

## ②……………古墳築造域の変遷

前方後円墳に代表される倭の古墳の具体的様相については、分厚い研究の蓄積があるので特にここでは触れない。東北地方における、古墳築造域の変遷のみを確認しておきたい（図1）。

### 《古墳時代前期》

太平洋側では、前方後円（方）墳の分布は、宮城県北部の大崎平野が北限となる。ただし、小規模方墳・円墳は、更に北の迫川流域まで分布し、宮城県域のほぼ全域まで分布することとなる<sup>(3)</sup>。日本海側では、確実な前期前方後円（方）墳の分布は、山形県南部の置賜盆地が北限である。しかし、方墳は村山盆地まで分布している。さらに庄内平野では、墳形は不明ながら、前期後半の定式化以前の長持形石棺が菱津で出土しており<sup>(4)</sup>、首長墓クラスの古墳が存在したと考えられる。

### 《古墳時代中期から後期初頭》

太平洋側では、岩手県奥州市（旧胆沢町）角塚古墳が造られ、分布域が拡大する<sup>(5)</sup>。ただし、同時に続縄文文化に由来する、黒曜石製石器の製作とそれを用いた生産活動も活発化しており、古墳分布域の拡大が、続縄文文化の後退を伴う訳ではない。日本海側では、庄内平野での確実な事例が見られず、村山盆地が古墳分布の北限となる。

### 《古墳時代後期》

6世紀に入ると、古墳築造域は大きく後退する。太平洋側では、宮城県南部の阿武隈川下流域まで古墳分布は後退する。古墳分布域からはずれる仙台平野と大崎平野では、今のところ2例のみであるが、古墳と続縄文系の墓との、折衷形式の墓が出現する。加美町（旧宮崎町）米泉館跡<sup>(6)</sup>と仙台市大野田古墳群<sup>(7)</sup>では、長方形墓壙に箱形木棺を入れる、古墳文化的な墓に、続縄文系の墓に特徴的な墓壙壁面に横に掘られた袋状ピットが伴う事例が知られている。日本海側でも古墳築造範囲は後退する。置賜盆地や会津盆地では、当該期に位置づけられる可能性が残る古墳も存在しているが、確実なものではない。

### 《終末期》

7世紀に入ると、古墳築造域は再度拡大する。同時に、竪穴系埋葬施設は姿を消し、横穴形埋葬施設だけとなる。太平洋側では、迫川流域まで横穴墓が造られ、横穴式石室墳も大崎平野まで分布する。前期と同じく、宮城県のほぼ全域に古墳築造域は拡大する。日本海側では、置賜盆地では横穴式石室墳が造られるが、村山盆地には確実な例がない。太平洋側ほどは、古墳築造域は回復しないようである。

簡単に各時期の様相を見てきたが、古墳築造域は大局的には、南東北までで確立しているように見える。しかし、詳細に見ると、古墳築造域には時期によって変動があり、その変動幅は決して小さくない。古墳築造域の広がり、角塚古墳を除くと前期が最も広い。古墳築造域が拡大していく訳でもなければ、一度確立した古墳築造域が安定して維持され続ける訳ではないことに、特に注意しておきたい。

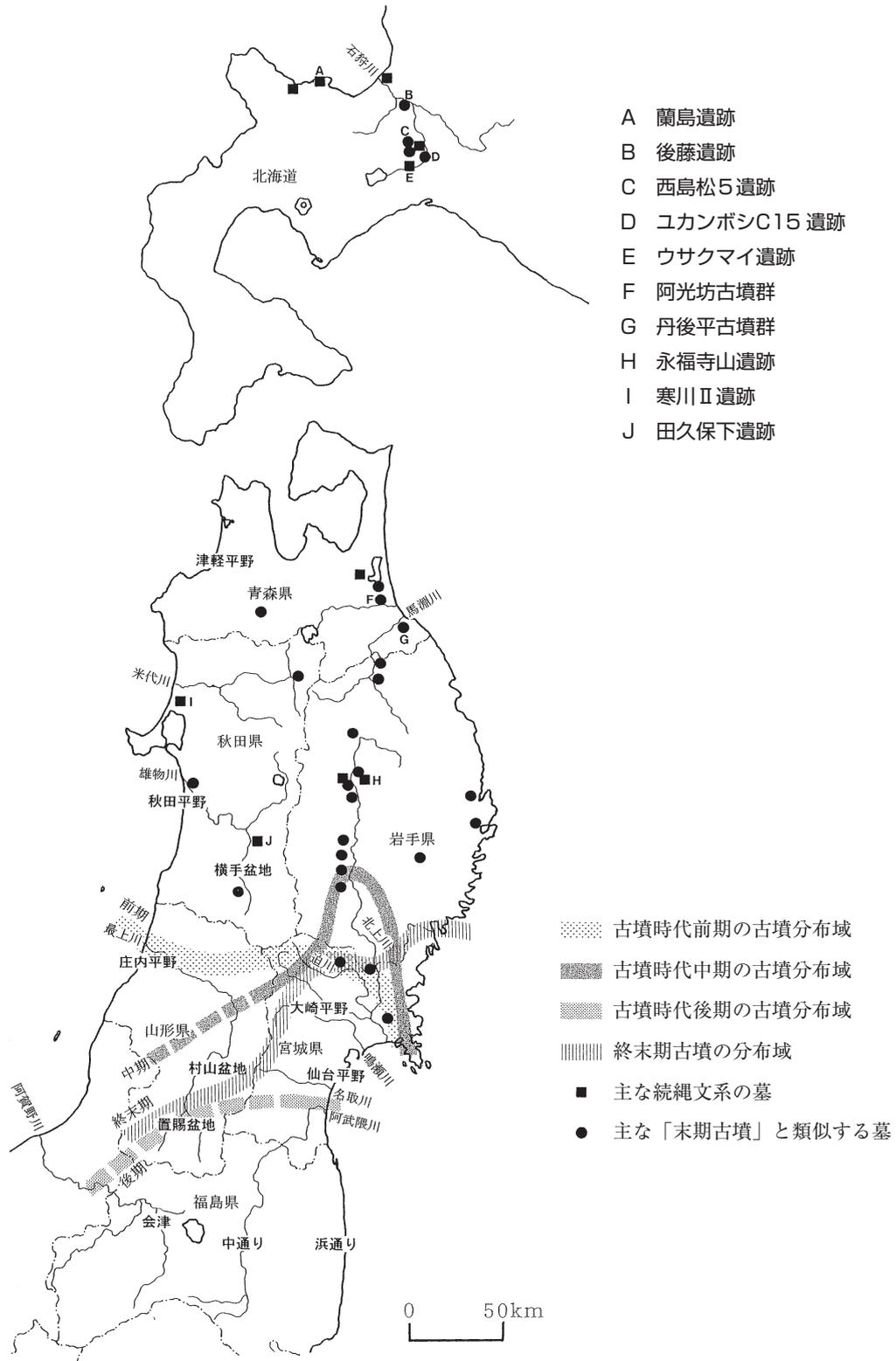


図1 古墳の築造域の変化と主な縄文系の墓と「末期古墳」の位置

### ③……………続縄文系の墓

弥生時代末に北東北に続縄文文化が拡大し、続縄文文化に由来すると考えられる、平面形が楕円形を基調とする墓が<sup>(8)</sup>、北東北にも見られるようになる。秋田県能代市寒川Ⅱ遺跡（弥生時代末・<sup>(9)</sup>図2）、岩手県盛岡市永福寺山遺跡（古墳時代前期初頭<sup>(10)</sup>）が初期の例である。これらには、鉄製品や玉類、土師器など、古墳文化の領域から入手したと考えられる遺物が副葬される。北東北では、古墳時代中期以降、副葬される土器に占める土師器・須恵器の割合が増大していく。6世紀後半の秋田県横手市田久保下遺跡（図2）では、副葬された18点の土器の内、北海道系の土器は1点のみで、他は土師器・須恵器で占められていた。このように、古墳文化の影響が徐々に大きくなっていく過程を経た上で、北東北においては、続縄文系の墓は7世紀以降は見られなくなる。代わりに「末期古墳」が造られるようになっていく。

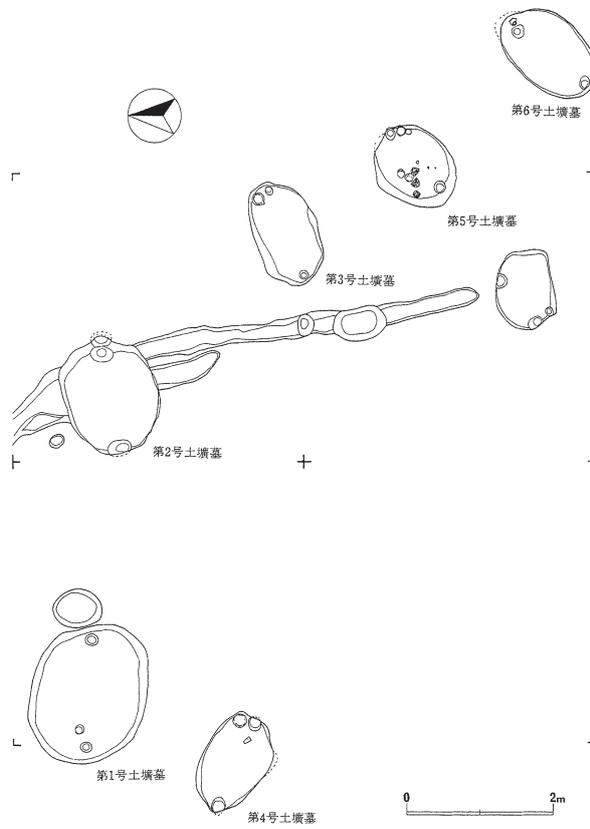
北海道では、7世紀以降も、続縄文系の墓の系譜に連なる墓が造られ続けていく。しかし、それらの中には、具体的な埋葬方法という観点から見ると、必ずしも同じでないものが含まれていることが、近年蓄積された良好な調査事例から明らかとなっていった。

恵庭市西島松5遺跡では、北大Ⅲ式から擦文前期にかけて、おおよそ7世紀から8世紀にかけて造られた多数の墓が検出されている（図3）。8世紀には、「末期古墳」に類似する周溝をめぐらした墓も造られて<sup>(12)</sup>いる。

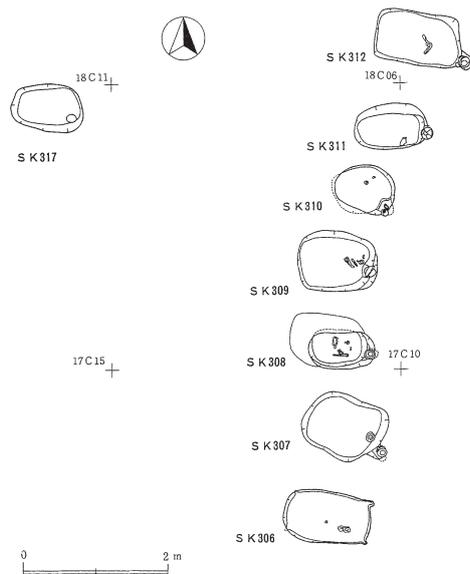
西島松5遺跡では、底面の4隅に小ピットが存在する例が多数発見されている。この小ピットは杭を打った痕跡と考えられ、その外側に木材を据えた痕跡が確認できるものもある。すなわち、四隅に杭を打ち、杭の外側の四辺に板材を置くことで、木棺を造り付けたものと推定される。四隅の杭が支えることによって、板材が内側に倒れ込まないようにした構造であったと考えるべきであろう。西島松5遺跡では、構造の違いにかかわらず、袋状ピットが伴い、土器が副葬されている例が多い。棺の高さは、この袋状ピットのレベル程度であった可能性があるが、確証はない。四隅に小ピットが見られる類似した事例は、8世紀前半の、千歳市ウサクマイ遺跡などでも見られる<sup>(13)</sup>（図4）。

このような墓壙内に木棺を造り付ける構造が、いつまで遡るかという点は、その系譜を考える上でも重要である。6世紀後半の秋田県田久保下遺跡のSK 306は、ピットは明瞭に確認されていないが、墓壙の四隅が小さく張り出すことから、ここに杭が打たれていた可能性もある。ただし、杭の位置から、板材を外側に据えられるかどうか問題が残る。既出資料の見直しを進め、検討を深めていく必要があるだろう。

西島松5遺跡では、四隅の小ピットが見られないタイプも存在する。P 20やP 21などで見られるもので、小口板部分に、溝状の落ち込みが伴うものである。長辺側にも、わずかな落ち込みが存在するものもある。これは、小口板を埋めて自立させ、その外側に長辺側の側板を立てかける構造であったと推定できる。側板が小口板によって支えられるため、側板が内側へ倒れ込まないようになる。小口板部分の落ち込みの断面形状が不整形のものが多いため、必ずしも整った形状の板材を埋め込んだものではない可能性もあるが、基本的な構造は、上述のように考えて良いであろう。これは、「末期古墳」で見られる小口板埋め込み式の木棺構造と、基本的に共通するもので、「末期古

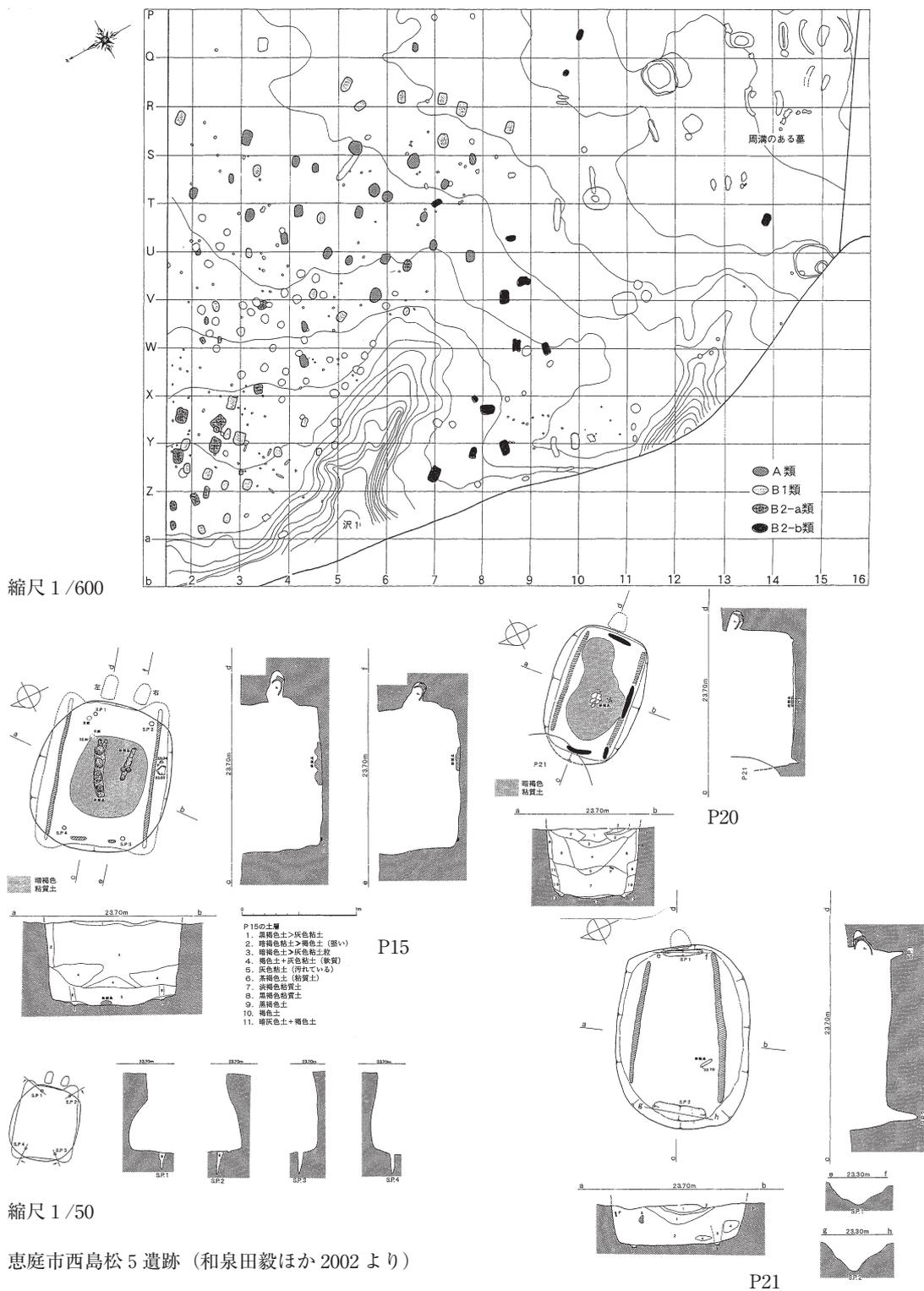


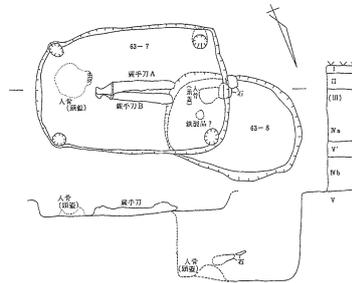
秋田県能代市寒川Ⅱ遺跡（小林克 1988 より，縮尺 1/100）



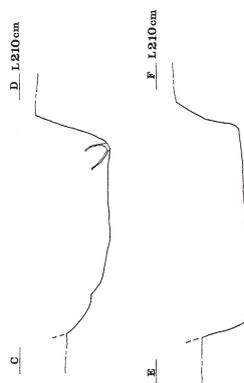
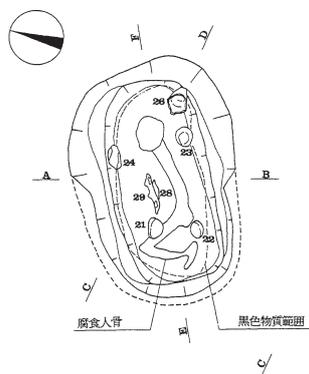
秋田県横手市田久保下遺跡（桜田隆ほか 1992 より，縮尺 1/100）

図2 北東北の続縄文系の墓



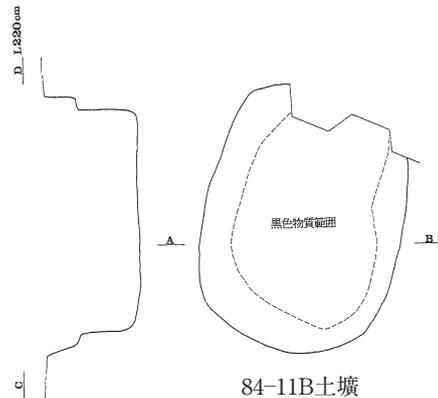
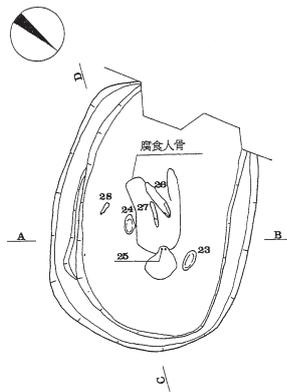
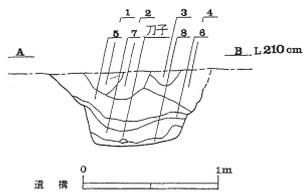


千歳市ウサクマイ遺跡 (ウサクマイ遺跡研究会編 1975 より, 縮尺 1/50)

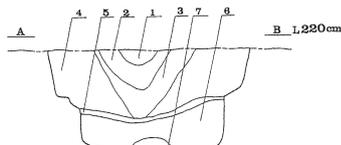


- 1 10IR 3/3 暗褐 砂層 炭化物を含む
- 2 10IR 4/4 褐 砂層 炭化物を含む
- 3 7.5IR 4/4 褐 砂層
- 4 10IR 5/4 にふい黄褐 砂層 小礫を含む
- 5 2.5Y 4/4 オリーブ褐 砂層 小礫を含む
- 6 10IR 2/2 黒褐 砂層 多量の炭化物と小礫を含む
- 7 10IR 4/3 にふい黄褐 砂層 小礫を含む
- 8 7.5YR 2/2 黒褐 砂層 粘性がある。人骨の一部と黒色物質の散布がみられる

84-10B土壌



84-11B土壌



- 1 5YR 1.7/1 黒 シルト混じり砂層 微粒、少量の炭化物を含む
- 2 7.5YR 3/1 黄褐 シルト混じり砂層 微粒、少量の炭化物を含む
- 3 5YR 2/3 暗赤褐 砂層 微粒、少量の炭化物を含む
- 4 5YR 4/3 にふい赤褐 砂層
- 5 7.5YR 3/2 黄褐 砂層 炭化物を含む
- 6 7.5YR 3/3 暗褐 砂層
- 7 7.5YR 2/2 黒褐 砂層 粘性がある。人骨の一部と思われる

小樽市蘭島遺跡D地点 (小樽市教育委員会編 1992 より, 縮尺 1/50)

図4 北海道の続縄文系の墓(2)

墳」の影響も考える必要がある。

これらの造り付け木棺とは全く異なる埋葬施設が想定される例もある。小樽市の蘭島遺跡D地点では、7世紀に属する墓が多数検出されている<sup>(14)</sup>。最も様相が明確な82-11B土壙を材料に検討してみたい(図4)。蘭島遺跡D地点では、人骨が分解しきらずに残っており、その痕跡から側臥屈葬と考えられている。断面図の7が、分解しきっていない人骨部分となる。土壙は2段掘りとなっており、段差の所に対応するように黒色物質が広がっていた。断面図の5の「黒褐色砂層」が、これに相当する。これが、木製の蓋の痕跡であると考え、全体の状況がうまく説明できる。墓壙に遺体を埋葬した後、2段に掘った墓壙の段差にかける形で、木材で蓋をする。大きさから考えると、複数の板材を並べたものであろう。蓋の上は埋め戻される。4の層が埋め戻し土と考えられる。蓋板が腐食し、中心部分から破損し、蓋上の埋土が、蓋の下の空洞へ流れ込む。流入土が6の層である。土砂の流入によって、蓋上の埋土は陥没し、そこに堆積した土が1・2・3の層である。以上のように復元すると、全体の状況が矛盾無く説明できる。すなわち、蘭島遺跡D地点の墓は、木蓋土壙墓と呼ぶべき構造であった。

蘭島遺跡D地点は、西島松5遺跡と重なる時期に造られており、大きく異なる構造が併存していたこととなる。ここに取り上げた構造で説明できない遺跡も、まだ存在しており、続縄文系の墓と一括したが、それらの具体的埋葬方法は、かなり多様であった可能性が高い。しかし、いずれの場合であっても、規模から見ると伸展葬は不可能で、屈葬であったと考えられる。屈葬という点では一貫しているのである。

#### ④……………「末期古墳」

7世紀初頭以降、主に東北北部には、小規模な円墳が造られるようになり、「末期古墳」と呼ばれてきた。「末期古墳」の特徴と歴史的評価については、以前に検討したことがあるので<sup>(15)</sup>、ここでは簡単にまとめておきたい。

7世紀初頭頃になると、北東北に方形堅穴住居と土師器が一般化し、ほぼ同時に「末期古墳」と呼ばれる小規模円墳群が成立する。ただし、この北東北の土師器は、南東北とは相対的に独自の様相を保持し続ける。「末期古墳」は、7世紀初頭に出現し、9世紀まで造られ続ける。

「末期古墳」は、北東北3県に普遍的に分布するほか、宮城県最北部の迫川流域・北上川下流域にも分布している。山形県では、確実な例が知られていないが、庄内平野には未調査で実態不明な小円墳群がいくつか存在しており、これらが「末期古墳」である可能性は残っている。さらに、北海道の道央部の石狩低地帯に分布し、「北海道式古墳」と呼ばれてきたものは、北東北の「末期古墳」と基本的に共通する。

「末期古墳」は、ほとんどが直径10m前後の小規模な円墳で、周溝をめぐらすのが基本である。墳丘の高さが判明する事例はほとんど無いが、1m前後の低い墳丘であったと推定される。主体部は木棺直葬か、横穴式石室の退化した石室を有する。少数ではあるが、墳丘を有せず、主体部のみが構築されている場合もある。

木棺直葬のものは、「末期古墳」の成立時から存在し、その終末まで続く。木棺の構造は、四辺

埋め込み式と、小口板埋め込み式に大別できる。四辺埋め込み式は、側板の四辺を墓壙底面に埋め込んで据えるものである。小口板埋め込み式は、短辺側の小口板のみを墓壙底面に埋め込んで立て、長辺側の側板は小口板の外側に据えて、小口板で支えられる形となる。図5に示した想定復元図は、いずれも、埋葬がなされた段階を示したもので、この後に蓋をして墓壙を埋め戻すこととなる。四辺埋め込み式は青森県下田町（現おいらせ町）阿光坊5号墳を、小口板埋め込み式は青森県八戸市丹後平20号墳を、それぞれモデルにした推定復元である。この両タイプの木棺が、「末期古墳」の木棺の主体を占め、それらは基本的な構造を変えずに最後まで続く。7世紀以降の北海道の墓との関係で、この木棺構造が問題になるが、これについては後でやや詳しく検討する。

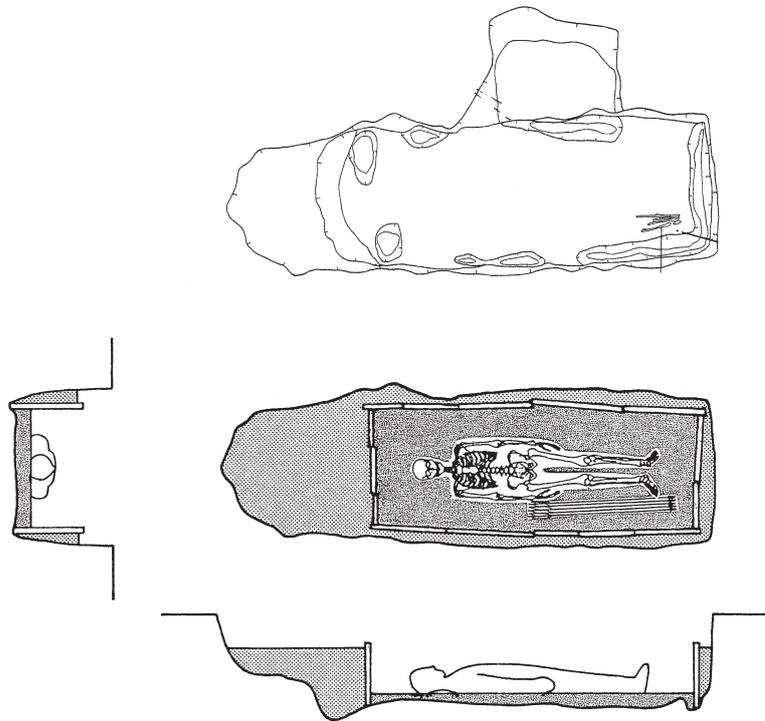
一方、横穴式石室の退化した石室は、7世紀末ごろに出現し、木棺より出現は遅れる。石室を伴うものの分布は、北上川流域に限定される。石室出現後も木棺直葬のものが造られており、木棺直葬から石室へ転換する訳ではない。石室の形態は、初期のものには前庭部の構造を残すものがある。初期のものを含めて、石室の規模が小さいことから、玄門から埋葬を行うことは難しい。天井部から埋葬した可能性が高く、単次葬と考えられる。

このような「末期古墳」の様相は、倭における後期から終末期の小規模円墳との共通性が強い。そのため「末期古墳」は、倭の古墳の強い影響のもとに成立したと考えられるが、全く同じではない。「末期古墳」の中でも、初期から存在する木棺直葬の主体部は、上述のように側板の四辺もしくは短辺を埋め込んで構築されたものであるが、このような主体部構造は、倭の古墳の中には近接時期の類例がない。倭の古墳の影響を受けつつも独自に創出された棺構造と考えられる。また、一つの古墳群の中でも、一地域の内部においても、さらに北東北全体の中でも、墳丘の規模、内部主体の構造、副葬品の構成において、明確な格差は顕在化しない。青森県八戸市の丹後平古墳群と隣接する丹後平(1)遺跡では、7世紀後葉から9世紀後葉の約200年間にわたって、同一群中で、類似した墳墓が造られ続けていた可能性が高いことが知られている。青森県おいらせ町の阿光坊古墳群では、7世紀前半から9世紀代に至るまで、類似した「末期古墳」が築造され続けていた。このように、墳墓における階層性が顕在化しないことは、倭の古墳のあり方とは大きく異なっている。倭の古墳に顕著な、被葬者相互の階層的関係を表現するという社会的機能が、「末期古墳」ではほとんど見出せないことは、大きな違いである。

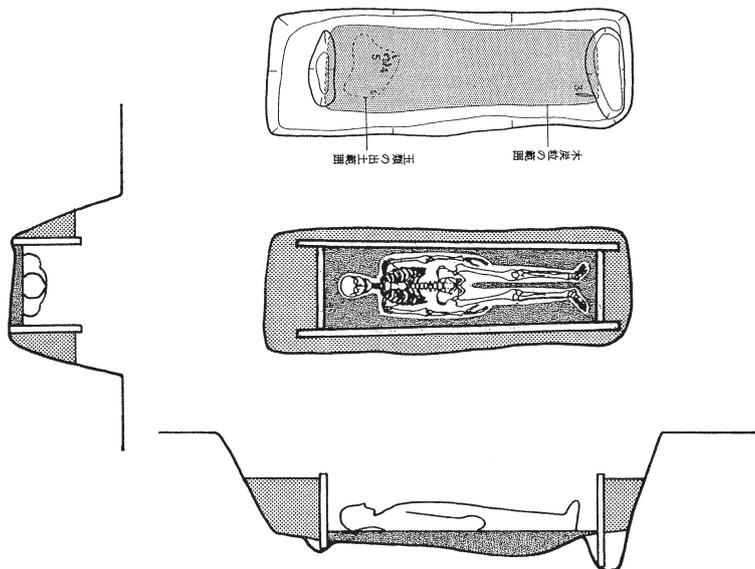
上述のように、北海道の道央部の石狩低地帯に分布し、「北海道式古墳」と呼ばれてきたものは、北東北の「末期古墳」と基本的に共通する。図6に江別市後藤遺跡15号墳の主体部の図面を示した。墓壙底面の周囲に残る痕跡から、四辺の側板を埋め込んだ、四辺埋め込み式の木棺であったと考えられる。北東北の「末期古墳」と共通する木棺が使われていたことが判明する。

近年の調査では、「末期古墳」に類似しつつも、やや異なる墓も発見されている。千歳市ユカンボシC15遺跡では、小規模な円形の周溝に囲まれた墓が3基発見されている。特徴が判り易いX-2の図を示したが、主体部の墓壙底面の四辺に、浅い落ち込みと木材痕跡と思われる黒色土が確認されており、四辺埋め込み式木棺であったと考えられる。北東北の「末期古墳」と共通する木棺と考えられるが、ユカンボシC15遺跡例では、墳丘盛土がほとんど存在しなかったことが確認されている。そのため報告では、「周溝のある墓」との名称が使われている。

多数の続縄文系の墓が発見された西島松5遺跡では、6基の「周溝のある墓」も発見されている。

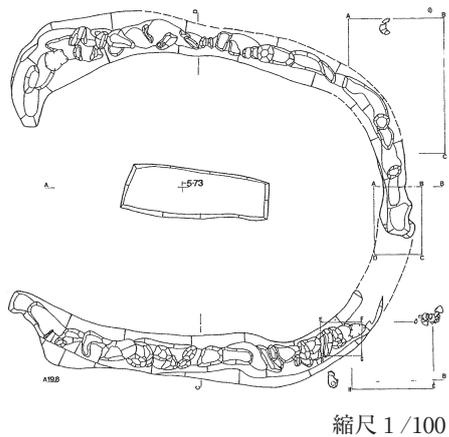


四辺埋め込み式  
モデルは青森県おいらせ町阿光坊5号墳（村越潔ほか1990より，縮尺1/50）

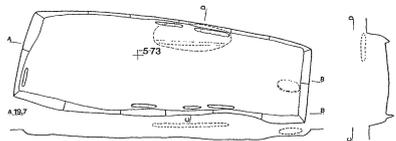


小口板埋め込み式  
モデルは青森県八戸市丹後平20号墳（工藤竹久ほか1990，縮尺1/50）

図5 「末期古墳」の木棺構造

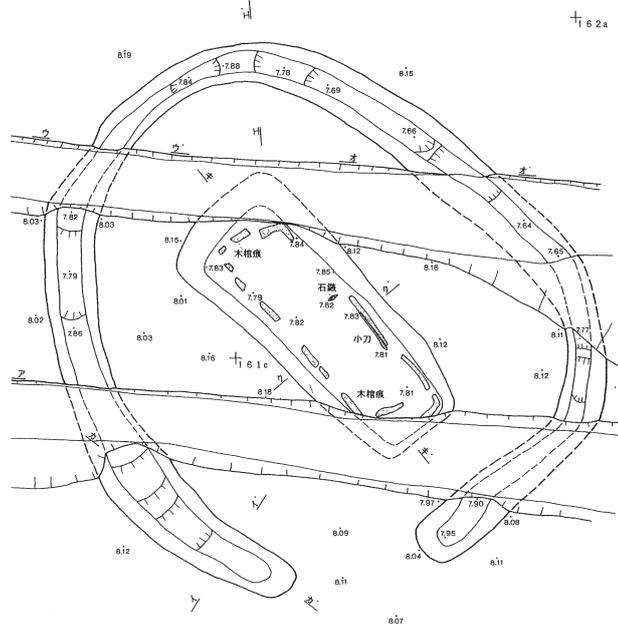


縮尺 1/100

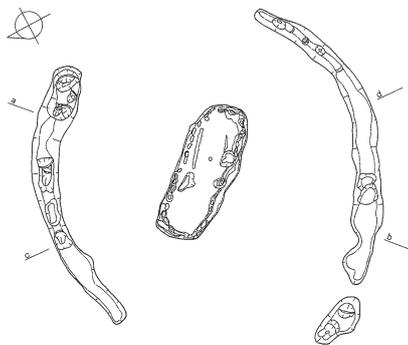


縮尺 1/50

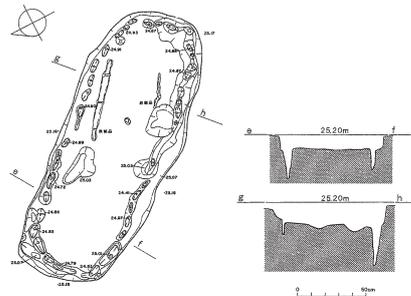
江別市後藤遺跡 15号墳  
(直井孝一・野中一宏 1981 より)



千歳市ユカンボシC15 遺跡周溝のある墓X-2  
(三浦正人・鈴木信ほか 1998 より, 縮尺 1/50)



縮尺 1/100



縮尺 1/50

恵庭市西島松 5 遺跡周溝のある墓X-6 (和泉田毅ほか 2002 より)

図6 「末期古墳」に類似する北海道の墓

耕作の影響で保存状態が良くなく、盛土の有無は確実ではない。主体部の状況が良く判る X-6 を図示した。幅があまり広くない板状の杭を、墓壇の四辺に密接に打ち込んで、棺を造り付けたものと考えられる。この構造も、「末期古墳」の四辺埋め込み式木棺と基本的に共通し、その変形と考えることもできるであろう。このように、北東北の「末期古墳」と強い共通点を持ちつつ、部分的に変化した墓も造られている。

## ⑤……………墳墓を中心に見た異文化間関係と境界

### (1) 古墳と続縄文系の墓・「末期古墳」との関係と境界

古墳時代併行期における南東北の古墳と北東北の続縄文系の墓、7世紀以降の南東北の終末期古墳と北東北の「末期古墳」の関係については、太平洋側の資料を中心に、これまでに度々論じてきた<sup>(23)</sup>。太平洋側では、宮城県北部に所在する湯の倉で産出する黒曜石が、続縄文文化の側で多用されることから、墳墓以外の要素を含めた検討が可能である。図7に、両文化が接する宮城県から岩手県にかけての、各種考古資料の分布の状況を示した模式図を掲げておいた。

古墳時代前期には、北上川中流域から大崎平野に至る南北約60kmの範囲で、古墳文化と続縄文文化の考古資料は、相互に入り組んだ形での分布域を形成する。両者の境界は、明確な境界線ではなく、広い境界領域として現れる。両者は排他的な関係にはない。

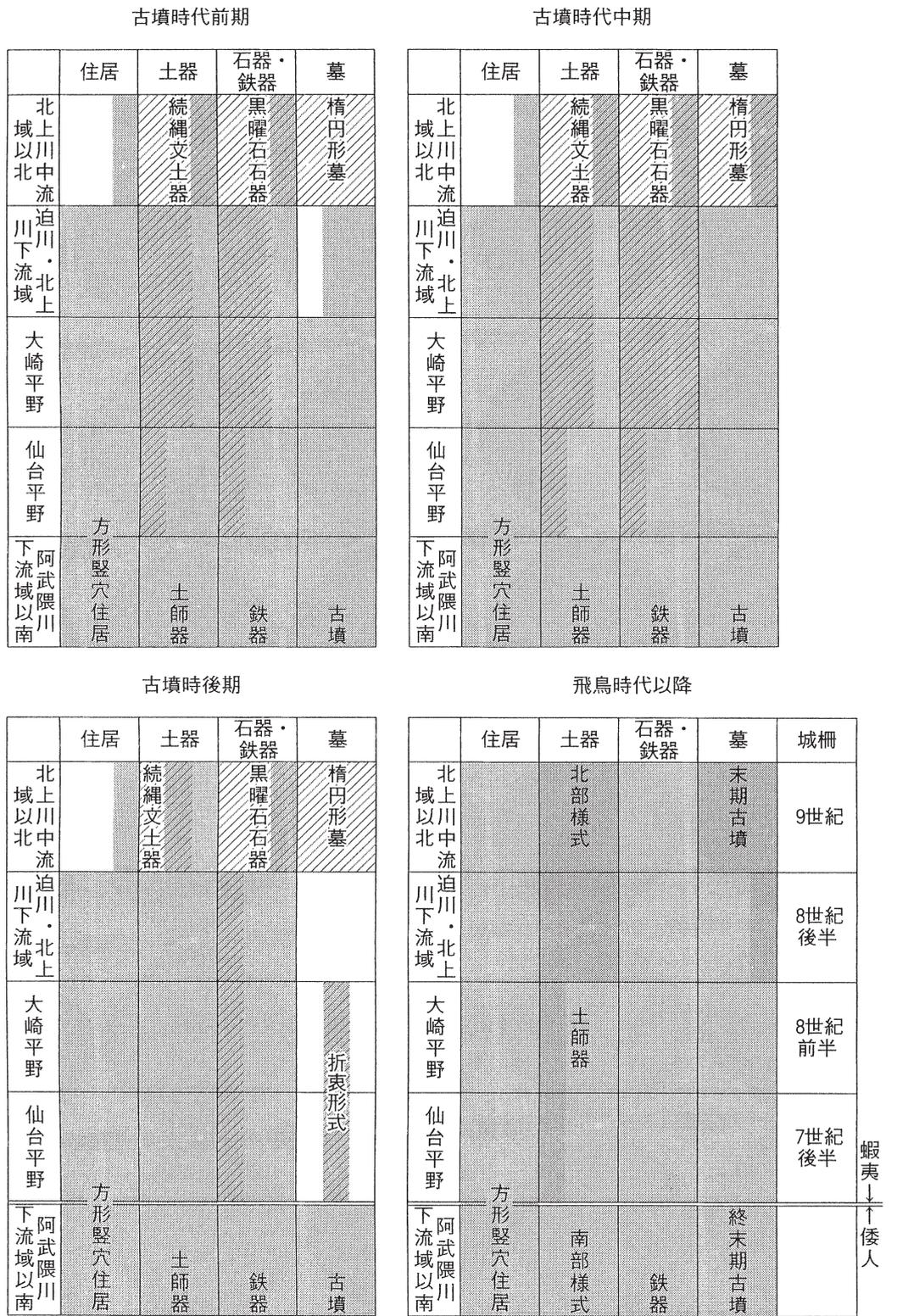
古墳時代中期から後期初頭には、角塚古墳が北上川中流域に造られ、古墳分布が拡大する。それと同時に、大量の湯の倉産黒曜石製石器が出土する、土師器を伴う方形竪穴住居が、大崎平野や角塚古墳周辺に出現する。同一地域のみならず、同一遺跡・同一遺構内で、古墳文化と続縄文文化のそれぞれに由来する考古資料が混在する現象が現れ、両者の境界はさらに不明確となる。角塚古墳に墳形や埴輪が類似する古墳は、宮城県の大崎平野から仙台平野に存在し、湯の倉産黒曜石石器の出土遺跡の分布と、かなり重複する。このことから、角塚古墳と類似する古墳に示される政治的関係は、続縄文文化に伴う経済的関係を組み込み、それに支えられていたと考えられる。古墳文化と続縄文文化の相互に依存する関係が、前段階以上に強くなっていったものと考えられる。

古墳時代後期には、古墳分布域が後退する。その中で、仙台平野や大崎平野では、古墳と続縄文系の墓の折衷型式の墓が出現する。仙台市大野田古墳群の折衷型式の墓は、埴輪を伴う古式群集墳が多数構築されていった場所に造られている。

このように、古墳時代における、墳墓を中心とする、考古資料に見える文化の違いは、常に漸進的な変移を示しており、明確な境界は存在していない。異なる文化の境界は、明確な境界線としてではなく、広い境界領域として現れる。

7世紀初頭以降、北東北にも土師器を伴う方形竪穴住居が普遍的に広まり、北東北も農耕を基盤とする社会へ転換していったと考えられる。墳墓では、7世紀初頭以降、倭系の横穴式石室墳や横穴墓が、宮城県の最北部まで造られる。一方、北東北には「末期古墳」が造られるようになる。「末期古墳」は、宮城県最北部の迫川・北上川流域にも造られ、倭系の横穴墓と近接して存在する。土師器は、北東北と南東北で異なる様相を保持し続ける。宮城県の大崎平野以南は南東北の、それより北の地域は北東北の土器様式に包摂される。ただし、大崎平野から仙台平野にかけての地域では、南東北と北東北の様相は混在し、その中でも北へ行くほど、北東北の様相が強くなっていく<sup>(24)</sup>。

このような中で、大和政権から律令国家へ至る中央政権は、仙台平野以北の人々を蝦夷として異族視していく<sup>(25)</sup>。そして、蝦夷に対する支配機構である城柵が、仙台平野以北に造られていくようになる。ここで重要な点は、古墳時代から古代にかけての各種考古資料の分布から見ると、最も違い



藤沢敦 2007 より

図7 宮城県から岩手県にかけての古墳時代から古代における各種資料の分布状況

が不明確なところに、倭人と蝦夷の境界が置かれていることである。

## (2) 「末期古墳」と続縄文系の墓

古墳時代併行期には、北東北から北海道に至るほとんどの区域が、続縄文文化の領域に含まれるため、顕著な違いは見出し難い。それでも、北東北では、古墳文化の影響が徐々に強くなっていくことが、副葬遺物の内容に反映されている。そして7世紀以降、北東北に「末期古墳」が造られるようになると、続縄文系の墓は、北東北では見られなくなる。北東北の「末期古墳」と北海道の続縄文系の墓という違いが、大きく見ると存在することとなる。

この両者の関係を考える上で重要なことは、「末期古墳」が、北海道にも分布するという点である。北海道で発見されたこの種の墓については、「北海道式古墳」と呼ばれてきた。しかし、墳丘や内部主体の特徴は、基本的に北東北の「末期古墳」と一致しており、別なものとして区分する必要性は認め難い。また、ユカンボシC 15 遺跡や西島松遺跡の事例のように、北東北の「末期古墳」と強い共通点を持ちつつ、部分的に変移した墓も造られている。

後藤遺跡においては、「末期古墳」は、そのみで存在する形で築造されている。ところが、西島松5遺跡では、続縄文系の墓が展開した後に、それに引き続いて「末期古墳」に類似する墓が造られていく。ユカンボシC 15 遺跡でも、続縄文系の墓（築造時期は擦文文化期）が、近接して造られている。また先述のように、西島松5遺跡の続縄文系の墓で確認された造り付けの木棺には、「末期古墳」との関係が想定される事例もある。このように、道央部においては、続縄文系の墓と「末期古墳」が、地域においてのみならず、同じ遺跡の中でも混在している。両者を截然と区分できる境界は存在しない。

北海道の各種墳墓の関係については、鈴木新も多方面から検討している。具体的認識については筆者と意見が異なる部分もあるが、「北海道の墓制には一斉的な転換はみられず、新来の葬法を遺跡ごと、遺跡内ごとに個別的に選択している」という評価は妥当なものである<sup>(26)</sup>。

## ⑥……………おわりに

古代の本州島北部から北海道の歴史研究においては、古代律令国家が他者と認識した「蝦夷」や「肅慎」について、「彼らは何ものなのか」という問いかけが、常になされてきた。その回答として、考古資料に見える文化の違いを、これら人間集団に対応させる考え方は根強いといえる。しかし、墳墓を中心に見た本論の検討からでも、異なる文化間の境界は、截然としたラインで区分できないことは明らかであろう。文化の違いが、人間集団の違いに、簡単に対応するものではないことを示している。このことは同時に、「蝦夷」や「肅慎」という他者認識と表裏一体の関係にある、「倭人」あるいは「日本人」という自己認識が、はたして何もののかを鋭く逆照射するものである。

このように、古代の本州島北部から北海道の考古学的研究は、人間集団のまとまりの本質と、文化との関係を考える上で、極めて重要な問題を孕んでいる。考古資料の分析に立脚し、異なる文化間の相互関係と境界を検討する中から、日本における歴史認識の根本的な再検討を進めていくことが課題であるし、可能である。そのためにも、本論では一部の指摘に留まったが、続縄文文化期か

ら擦文文化期にかけて展開する墓については、その具体的な埋葬施設と埋葬方法の検討が、さらに深められる必要がある。今後の課題としておきたい。

註

- (1)——藤沢敦 2001「倭の周縁における境界と相互関係」『考古学研究』第48巻第3号, 41~55頁。藤沢敦 2004「創出された境界—倭人と蝦夷を分かちもの」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会50周年記念論文集, 261~268頁。藤沢敦 2007「倭と蝦夷と律令国家」『史林』第90巻第1号, 4~27頁。
- (2)——北海道の当該期を考える上では、オホーツク文化に伴う墓についても検討する必要があるが、今回は取り上げられなかった。今後の課題としておきたい。
- (3)——藤沢敦 2000「栗原・登米・本吉地方の古墳墓」『阿部正光君追悼集』69~80頁, 阿部正光君追悼集刊行会。
- (4)——柏倉亮吉 1953『山形県の古墳』。
- (5)——朴沢志津江ほか 2002『角塚古墳—整備基本計画策定に伴う形態確認調査報告書—』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第28集。
- (6)——藤村博之・伊藤裕 1996『米泉館跡』宮崎町文化財調査報告書第5集。
- (7)——仙台市教育委員会 2005「2004年度宮城県内主要発掘紹介 大野田古墳群」『宮城考古学』第7号, 235頁。
- (8)——統縄文文化から擦文文化にかけての時期に造られる墓には、平面形が円形に近いものから、楕円形のもの、隅丸長方形に近いものまで、細かな形態にはかなり差がある。その細かな形態の差が、具体的な埋葬施設や埋葬方法の差を反映している可能性があり、本来は区別していくべきである。その際には、具体的な埋葬施設や埋葬方法の復元が、まず検討される必要があるため、ここでは「楕円形の墓」としてとりあえず一括しておきたい。また、本論で指摘するように、これらの墓は、具体的な埋葬の違いにもかかわらず、いずれも屈葬であると考えられ、その点では一貫した葬法であると言える。
- (9)——小林克 1988「一般国道7号八竜能代道路建設に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅰ—寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡—」秋田県文化財調査報告書第167集。
- (10)——津嶋知弘 1997『永福寺山遺跡—昭和40・41年発掘調査報告書—』盛岡市教育委員会。
- (11)——桜田隆ほか 1992『秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第220集。
- (12)——和泉田毅ほか 2002『恵庭市西島松5遺跡—柏木川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書(助北海道埋蔵文化財センター調査報告書第178集)』。
- (13)——ウサクマイ遺跡研究会編 1975『烏柵舞』雄山閣。
- (14)——小樽市教育委員会編 1992『蘭島遺跡D地点』小樽市埋蔵文化財調査報告書第5輯。
- (15)——藤沢敦 2004「倭の「古墳」と東北北部の「末期古墳」」『古墳時代の政治構造』295~308頁, 青木書店。
- (16)——村越潔ほか 1990『阿光坊遺跡発掘調査報告書』下田町埋蔵文化財調査報告書第2集。
- (17)——工藤竹久ほか 1990『丹後平古墳群』八戸市埋蔵文化財調査報告書第44集。
- (18)——村木淳・藤田俊雄 1996『丹後平(1)遺跡・丹後平古墳群』八戸市埋蔵文化財調査報告書第66集。
- (19)——小谷地肇ほか 2007『阿光坊古墳群発掘調査報告書』おいらせ町埋蔵文化財調査報告書第1集。
- (20)——直井孝一・野中一宏 1981『Ⅱ後藤遺跡』『元江別遺跡群』江別市文化財調査報告書XIII, 23~104頁。
- (21)——三浦正人・鈴木信ほか 1998『千歳市ユカンボシC15遺跡(1)』(助北海道埋蔵文化財センター調査報告書第128集)。
- (22)——註12に同じ。
- (23)——註1に同じ。
- (24)——村田晃一 2000「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺—移民の時代—」『宮城考古学』第2号, 45~80頁, 宮城県考古学会。村田晃一 2002「7世紀集落研究の視点(1)」『宮城考古学』第4号, 49~71頁, 宮城県考古学会。
- (25)——中央政権の側が、どの範囲の人々を蝦夷と認識していたのかについては、文献資料の分析に多くを依拠して考える以外にない。今泉隆雄 1999「律令国家と蝦夷」『宮城県の歴史』29~73頁, 山川出版社。
- (26)——鈴木信 2004「『北海道式古墳』の実像」『新北海道の古代3 擦文・アイヌ文化』10~25頁, 北海道新聞社。

(東北大学埋蔵文化財調査室, 国立歴史民俗博物館研究協力者)

(2008年9月30日受理, 2009年1月21日審査終了)

---

## Graves in Northern Honshu and Hokkaido in the Ancient Period

FUJISAWA Atsushi

During the period when the ancient state was being formed in Japan, a separate history was unfolding in the region from northern Honshu to Hokkaido. Whereas kofun (mounded tombs) were built in southern Tohoku, in northern Tohoku and Hokkaido, Zoku-Jomon (continuing Jomon) type graves were built. There were three broad types of graves in the period starting in the 7th century: end stage kofun in southern Tohoku, “final stage kofun” in northern Tohoku, and Zoku-Jomon type graves in Hokkaido.

The author studied southern Tohoku kofun and Zoku-Jomon type graves in northern Tohoku on the Pacific Ocean side, for which there is an abundance of materials, and their relationship with “final stage kofun” in the period starting from the 7th century. With regard to cultural differences as seen from archaeological materials centering on graves, changes were consistently incremental and there were no clear boundaries. The boundary between one culture and another covered a large area with no definitive line of demarcation. From the time of the Yamato government to the establishment of the *ritsuryo* state, central government regarded people from north of the Sendai Plain in the center of Miyagi Prefecture as Emishi, who were ethnically different. The distribution of various archaeological materials reveals that the least clear differences are to be found within the boundaries between the Yamato and Emishi peoples.

In northern Honshu and Hokkaido, there is a marked difference between the “final stage kofun” of northern Tohoku and the Zoku-Jomon type graves of Hokkaido in the period starting from the 7th century. An important point to consider when studying the relationship between the two is that “final stage kofun” are also to be found in central Hokkaido. In central Hokkaido graves were built that had been partially modified while maintaining strong similarities with the “final stage kofun” of northern Tohoku. What is more, there are cases where graves resembling both Zoku-Jomon type graves and “final stage kofun” were built at the same site. There are also some Zoku-Jomon type graves that display hints of the influence of “final stage kofun”. In central Hokkaido there is a strong relationship between “final stage kofun” and Zoku-Jomon type graves, which makes it difficult to establish a clear boundary line between the two.

This study centering on these graves shows that it is not possible to draw a clear boundary line

---

delineating these different cultures. It shows that cultural differences don't readily correspond to differences in human groups.

Key words : kofun, Zoku-Jomon type graves, final stage kofun, cultural changes, boundary